第4節　神通川下流域の弥生時代

本遺跡とその周辺遺跡は神通川下流域に立地する。この地域は縄文時代晩期から形成されてきた自然堤防などの微高地を利用し営みがなされたと考える。打出遺跡では晩期末の土器がわずかであるが出土した（富山市教委2004)。ただ川の下流域という特色から度重なる洪水等があり弥生時代中期後半までは今の所人々の営みが見られない。中期後半は四方荒屋遺跡、打出遺跡で当該期の土器が出土しているが短期間での営みが確認出来ただけである。

後期になると猫橋式前半期までは人々活動が見られないようで大きな洪水等の自然環境の変化が大きく起因するものと見られている。猫橋式後半期、天王山式土器も伴うこの時期に四方荒屋遺跡や江代割遺跡での営みが確認されている。この後の弥生時代後期後半以降、四方背戸割遺跡、打出遺跡、江代割遺跡が古墳時代前期まで継続して人々の営みがなされており、以降のこの地域への定着化へと進んでいくように思われる。本遺跡は現況の調査の中においては定着化が進む後期後半以降の展開は見られないため、弥生時代後期後半以降は隣接する四方背戸割遺跡や江代割遺跡で安定した微高地が形成されたためか両遺跡のほうへ営みの中心を移したと考える。

表12　遺跡消長表

時代	時期	様式	型式	四方荒屋遺跡	四方背戸割遺跡	江代割遺跡	打出遺跡	今市遺跡
縄文	晩期		長竹				▨	
弥生	前期	Ⅰ	柴山出村					
	中期	Ⅱ	矢木ジワリ					
		Ⅲ	小松					
		Ⅳ	磯部	▨				
			専光寺	▨			▨	
			戸水B					
	後期	Ⅴ	猫橋	■	■	■	■	
			法仏		■	■	■	
	終末期		月影			■	■	▨
古墳	前期		白江		▨	■	■	
			古府クルビ		▨	■	■	
			高畠			■		

■ 遺物遺構を伴う　▨ 遺物のみの出土

第5節　天王山式土器について

1．はじめに

今回の調査では7点の天王山式土器が出土した。天王山式土器は福島県白河市天王山遺跡出土の土器を指標とする弥生時代後期の土器型式である。富山県内の事例としては1974年に上野章氏が高岡市頭川遺跡（現：間尽遺跡）出土の天王山式土器を紹介したこと（上野　1974）を端として認識されるようになった土器である。その後、石川日出志氏による下老子笹川遺跡から出土した天王山式土器の

検討、考察（石川　1998、2006）や久田正弘氏による石川、富山両県での出土資料の集成や検討（久田　2008、2009）、拙論では富山県内出土の天王山式土器を集成し、東北や越後との交流についての検討を行った（藤田　2013）。

2．最近出土の天王山式土器について（第27図）

北陸新幹線建設に伴う調査の報告が最近増加したことにより拙論の集成（藤田　2013）以降の新出資料をとりあげながら今回の調査の出土した天王山式土器を考えていきたい

・四方荒屋遺跡（本報告）

今回の調査で7点が出土した。SD965から出土した遺物が猫橋式の土器と共伴している。

・北堀切遺跡（黒部市教委　2013）

黒部扇状地の先端部に立地し、海岸からはさほど離れていない。遺物包含層となるⅤ層より出土した。報告書では縄文時代後期の土器とあるが、図面および遺物写真から天王山式土器であると判断した。調査区内では単独の出土である。また、2007年の調査においても天王山式土器が1点出土した（黒部市教委2009　藤田2013）。

・新堀西遺跡（富山県文化振興財団　2013）

常願寺川扇状地の先端部に立地し、海岸からは4、5㎞離れた場所となる。いずれも小片であるが弥生時代後期の遺構から出土した。遺跡の主体は弥生時代後期後半の法仏式であるが、一部猫橋式となるものが確認出来、同時期に存在していた可能性もある。

・上梅沢遺跡（富山県文化振興財団　2013）

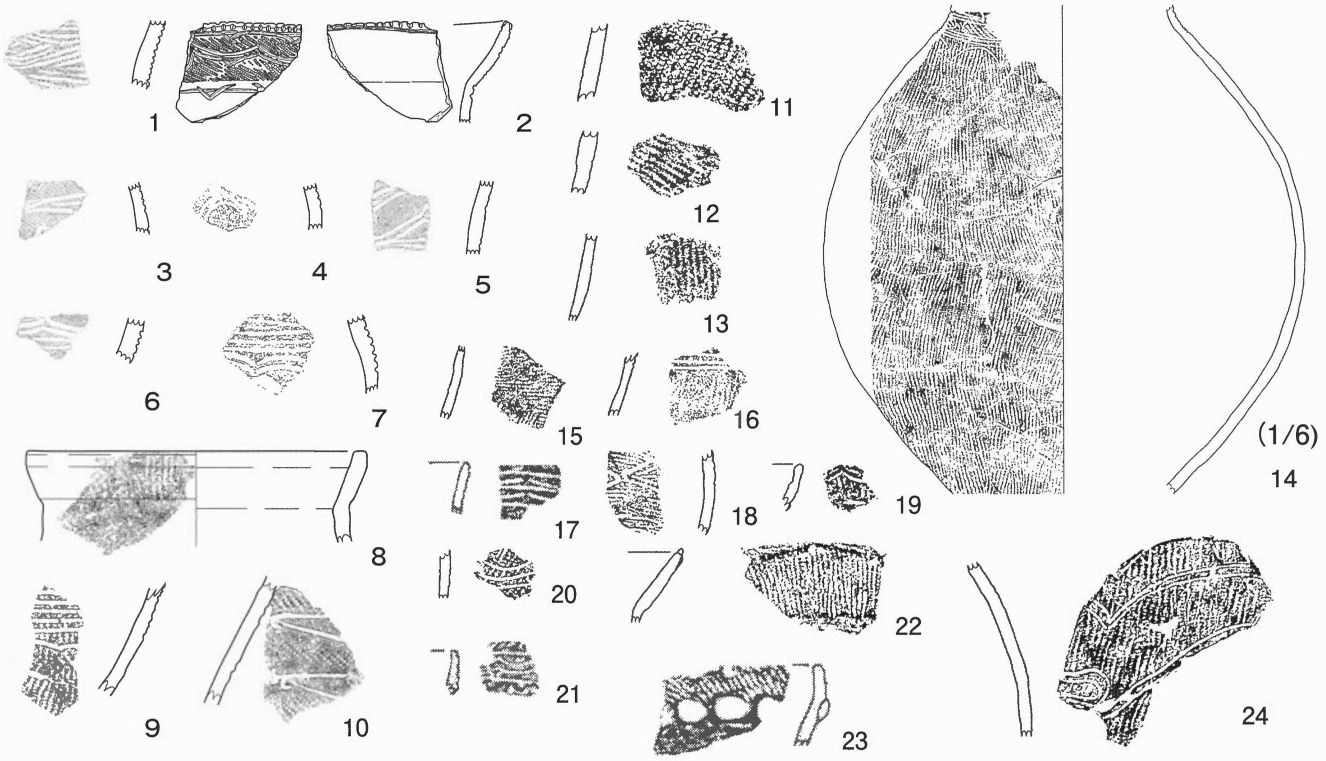
早月川によって形成された扇状地先端部に立地し、海岸からは2、3㎞離れた場所となる。遺構から壺が一点出土した。壺は頸部付近に直線や弧状の沈線を縄文の地紋の上から付している。同時期の在地系の土器の出土は無い。

3．天王山式土器の出土状況と土器の特色

新出の4遺跡のうち、四方荒屋遺跡・北堀切遺跡・上梅沢遺跡は、天王山式土器単独あるいは出土量の大半を占め、新堀西遺跡は在地土器が主体の遺跡で少量の天王山式土器が出土する。四方荒屋遺跡は、周辺に在地系土器が主体となる同時期の江代割遺跡や四方背戸割遺跡があり、今回の調査区はこれらの遺跡と関わる一時的な交易目的のキャンプサイトであったと考えられる。他の2遺跡についても北堀切遺跡は周辺に堀切遺跡など法仏式前半段階の土器が出土する遺跡があり、上梅沢遺跡は周辺にそのような遺跡が確認されていないが、佐伯遺跡を想定する。新堀西遺跡については古墳時代まで続く長期的な集落であり、交易拠点として天王山式土器が持ち込まれたと考える。

また、四方荒屋遺跡出土の土器は明らかに在地土器とは胎土が異なり、越後や東北でつくられた土器とみられる。他の遺跡から出土した土器についても、実際の観察や掲載写真の判断から在地とは異なる胎土であるものが多くを占める。年代は弥生時代後期前半の猫橋式に並行すると考えており、他の新出資料も含めて概ねその時期に並行し、新しくとも法仏式の前半段階までとなる。

四方荒屋遺跡の天王山式土器の出土は、弥生時代後期前半に越後あるいは東北の人々が交易にために移動し、在地の集落から離れた場所をキャンプサイトに交易活動に従事していたことを示している。また、この時期を境にして越後や東北との交流を示す遺物は四方荒屋遺跡をはじめ、富山県内各地の弥生時代、古墳時代の遺跡でみられなくなり、むしろ越後や東北で北陸の土器の出土が見られることから、交易や人々の移動に変化があったことも推測出来る。



1～7 四方荒屋遺跡　8～10 北堀切遺跡
11～14 上梅沢遺跡　15～24 新堀西遺跡

第27図　最近出土の天王山式土器

第28図　天王山式土器出土地